

カフカの「考察」と『審判』

——Wolfgang Starosté の解釈に基づいて——

吉 野 英 俊

(1)

ここで言う「考察」とは主として、カフカが1917年と1918年に書きこんだ青色の八折り判ノートの中にある彼の思想のことである。その中でもとりわけカフカが他の断片と区別して、アフォリズムとして109の番号を付し、編者M・Brodによって『罪、苦悩、希望、まことの道についての考察』と標題をつけられたものが中心となっている。

Werner Hoffmann はその著 ⁽¹⁾《Kafkas Aphorismen》の中で、アフォリズムがカフカ文献の中で占める特殊な位置を指適している。というのは、長篇や物語、小さな断片にいたるまで、文学作品に対してはきわめて様々な視点からの多くの解釈がある一方、アフォリズムはといえただ折にふれて論ぜられ、解釈されたにすぎないからである。そしてこれまでアフォリズムに基づいてカフカが敬虔なユダヤ人として、グノーシス派の人として、あるいはマニ教徒、無神論者としてみなされえたという事実から、従来の解釈者たちはその先入見を裏書きするためにアフォリズムを利用してきたにすぎないと述べている。従って、Hoffmann が強調するのは、個々のアフォリズムをテキスト全体の関連から、そして日記、書簡、断片という形で書かれている考察を顧慮しつつ解釈せねばならぬということである。その時にのみアフォリズムの意味のある解釈は

可能なのだ。

そのようなわけで、Hoffmann はアフォリズムを文学作品の解釈に応用することには全く意を払っていない。彼は、J・Kobs の「詩人のアフォリズムを導きの糸、鍵として利用することがおそらく念頭に浮かぶだろう。このような試みはすでにカフカ研究において何度も企てられた。だが、疑う余地のない成果をあげたのはごくまれにしかない」という確認に同意しながら、アフォリズムから推論されるべき世界観が文学作品の解釈に役立ちうるかどうか、あるいはどの程度役立ちうるのかという問題は、当面われわれの関心をひかない、と述べている。

文学作品へのアフォリズムの応用が失敗する理由として Hoffmann は、特定のアフォリズムが恣意的に取り出されたこと、及びテキスト全体に従ってカフカの宗教観の観念を作りあげようとしなかったこと、この二点をあげている。

ところで、W. Staroste の遺稿『Der Raum des Menschen in Kafkas „Prozeß“』⁽²⁾では、実に巧みに、八折り判ノート中の考察やアフォリズム、ヤノーホとの対話等を導きの糸としつつ、『審判』を解釈している。あまりにも短く、比喩的で、意味不明だったカフカの諸考察が、逆に文学作品の解釈に応用されて初めて明らかになったと思われるケースも少くなかった。ここに若干の私見を加えつつ、私なりにまとめて紹介したいと思う。

つとに知られているように、ブロートはカフカのアフォリズムと叙事文（長篇、短篇、断章）とを対立させ、この両者を区別しないかぎり、正しいカフカ⁽³⁾解釈は不可能だと強調している。これは、その当時（1948年）カフカ文学があまりにニヒリスティックに解釈されている傾向に対する彼の警告である。長篇と短篇に見られる「ひどい恐怖と孤独のうちに戦える人」という側面だけでなく、アフォリズムのカフカ、即ち「人間の中に「不壊者」を認め、世界の形而上学的な核心に対して積極的な敬虔な関係を持つ」信仰者としての彼を明確にうちだしている。従って、アフォリズムを文学作品の解釈へ応用することには、Hoffmann は無関心であるけれども、少なくともブロートの意には添うであ

ろう。というのも、彼自身「カフカの作品のうちで箴言と叙事文との二つの群は両々あいまち補って、あたかも或る色とそれの補色とが一つをなすが如く全き姿になっている。」と述べているからである。

Staroste が解釈の途中でしばしば引用するカフカの考察は、もっぱら主人公ヨーゼフ・K の理解しえない、裁判所側の論理を注釈するものとして利用される。カフカの考察の多くは永遠という時空を超えた領域に向けられているからである。

Staroste の解釈にはいる前に、『審判』にあらわれている二つの世界（K の日常生活圏と裁判所世界）と、カフカが理解した人間の存在状況について述べておきたい。

物語の背景の「日常性」の中で突然あたかも噴出のごとく現れる「非日常性」。それは例えば『判決』の父の宣告であり、『変身』の毒虫である。主人公たちは彼らの理解を超えた非日常的なものの出現によって破滅してしまう。このような二つの異質な世界は、長篇『審判』や『城』ではひとつの背景の中へはめこまれており、もはや明確には分化されえない。「日常的なもの」はもはや「非日常的なもの」と対決させられるのではなく、「非日常的なもの」に変わっている。ここから、現実的な要素から組み立てられた不条理な世界という、⁽⁴⁾独自の玉虫色に輝く効果が生じる。

それでもカフカは、二つの世界の境界を彼独特の形象を用いて読者に知らせている。その典型的な例は裁判所事務局の廊下の「むしむしと重苦しい、窒息しそうな空気」である。そこでは K は気分が悪くなるばかりか、歩行困難になり、あわや失神しかけるほどである。（一方、裁判所の人間である案内係と娘は逆に新鮮な空気に耐えられないのだ。）

これと同様の形象は、最初の審理室、銀行の物置、弁護士フルトの部屋、画家のアトリエ、聖堂の中の説教壇にも見出せる。それによってこれらの空間も程度の差こそあれ事務局と同質の空間であることがわかる。ここでその一例だけを挙げると、最初の審理室となる部屋は「天井にくっつきそうな回廊に、ぐらりと取りかこまれて」おり、その回廊は「身をかがめてしか立つことのでき

ない」ものであり、空気は「ひどくよどみ」「もやがかって」いる。

裁判所に関連のある空間は、以上のように、たいていその「狭さ」、「低さ」、「暗さ」、「汚れ」、「息苦しさ」という特徴を帯びている。

だが、空間のみならずそこに現れる諸人物も K の理解しがたい何らかの非日常的な特徴を帯びている。例えば、K には旅行服のように思われる黒服を着た二人の監視人、「そばに寄ると、胡椒のような、からい刺激的なおいをする」レーニの「けづめ」、あるいはその「イタリア語の方言が K にはほんのきれぎれにしか理解できない」ところの銀行の顧客、さらにはレーニがすべての被告に「美しさ」を認めるのと同様に、K の目に「美」を認める延丁の妻、まるで操り人形としか見えない二人の死刑執行人などである。このような二つの世界は、カフカの考察を見るならば、もっと明確な形で現れている。

「認識が始まった最初のじろしは死への願望である。この生は耐え難く、もう一つの生は到達し難く思われる。」(A. 13)

あるいは「かれは自由でまちがいのない現世の市民である。というのは、かれは、この世のどんな場所へも行けるだけの長さはあるが、しかしどんなことがあってもこの世の境界をとびこえられぬほどの長さの、鎖につながれているのである。だが、同時にまた、かれは自由でまちがいのない天国の市民でもある。というのは、かれはまた同じように計算された天国の鎖につながれているのだ。現世へ行こうとすれば、天国の首輪にのどをしめられ、天国へ行こうとすれば現世の首輪にのどをしめられる。そのくせ、どんな可能性もあるわけで、自分でもそう思っている。そればかりではない。すべてを最初のしほりまちがいのせいにする事さえ、かれは拒むのだ。」(A. 66)

「もう一つの世界」はカフカの考察の中では「天国」「樂園」「真理」「善」などと様々にその名を変えるが、その実質は同じ物であるように思われる。カフカはたとえそれが「到達不可能」だとしても、それに憧れを抱いている。(K

の逮捕は彼自身は理解していないが実はその憧れに外ならない。)

「目標はある。しかし道はない。われわれが道とよんでいるのは、逡巡にほかならぬ。」(A. 26) という考察はそこから生まれる。カフカは片時もこの憧れを断念することはない。そうしている限り彼の前には光が、永遠の輝きがある。もっとも、この憧れを理解していないヨーゼフ・Kは生涯の最後に臨んでこの光を垣間見るにすぎないのだが。

「現世に汚れた眼で見れば、われわれは長いトンネルのなかで列車事故に遭遇した旅客のような立場にある。しかも、事故の現場からは、入口の光はもう見えないし、出口の光はほんとに小さくて、ひっきりなしに眼を見張っていても、じきに見失ってしまうのだ。そのうちに、入口も出口もおぼつかなくなるという立場である。ところで、われわれの身边は、感覚の混乱のためか、感覚が極度に敏感になったためか、見えるのは化けものばかりで、めいめいの気分や驚き方しだいで、たのしくもあれば、つらくもあるような万華鏡的風景だ。」(H. 54)

この考察とすでに引用されたアフォリズム66は、カフカが理解した人間の原状況を示す好個の物であろう。

(2)

Kのもとに派遣された二人の監視人は、自分たちがKに対して〈親切〉であることをしきりに強調する。⁽⁵⁾

「……………こんなに親身になって話してあげるのは、わたしの任務外のことなんだぜ。だがフ란ツ以外には聞いている人もいなかろうし、奴自身からしてが、規定を犯して妙にあんたに親切なんだ。……………」

ところで、この〈親切的な〉監視人たちがKに勧めるのは、自室に戻って、待

ち、静かにしていることである。この助言は何度か繰返される。

「…………部屋にもどって待っていたまえ。訴訟はとにかく始まったんだから、時さえくれば万事まちがいなく知らせてもらえるはずだ…………」(P. 8)

あるいは「ところで忠告しておくが…………部屋にもどって、静かにし、指令を受けるまで待ったがいいね。とりとめもなくいろいろなことを考えていないで、ちゃんと気をおちつかせておくんだ。あんたはとてつもない力だめしをさせられることになるからな。…………」(P. 12)

Kが聞きもらしてしまう彼らのこの忠告の意味は、カフカの文学外の言葉を関連させて考えるならば、重要なものであることが明らかになる。〈待ち〉〈静かにしている〉ことは、他者あるいは世界を理解するために不可欠な行為なのである。Staroste はここで次の三つの考察を挙げている。

「心すべきは、刃を心に突き刺されたとき、静かに見守ることだ。血を失わないことだ。刃の冷さを石の冷さで受け止めることだ。刺されたために刺されたあとで、不死身になることだ。」(H. 60)

「君が家を出る必要はない。机に向かって聞くのだ。聞いてもいいけない。ただ待っているのだ。待ってもいいけない。ひとりっきりで、じっとしているのだ。世界は仮面をぬぐことを申し出るだろう。ほかにどうしようもないのだ。世界は歓喜に酔いしれて、君の前で身悶えするだろう。」(A. 109)

「——自分自身を喪失してどうして他者を発見できるでしょうか。他者——これは鴻大な深さをもつ世界そのものの姿です——他者は静けさのうちにのみ自己を開いてみせるのです。」(J. 221)

〈親切だ〉と自称する監視人は上記の「考察」が表現している態度をKにとらせようとするものなのだ。Kはなるほど部屋にもどりはするが、そこでの彼の振舞いは語り手が伝える彼の日常生活の中での傾向に相応している。「なにごとでもできるかぎり気楽に考え、最悪の事態は、その最悪の事態そのものがあるらわれてからはじめてこれを信じて、たとえ雲行きが非常にあやしくなってきたときでもかくべつなにも将来のための措置などはこちらでおかないというのが、つね日ごろの彼だった」と語り手は伝えている。自室のKはベッドに身を投げ、洗面台上のリンゴをひとかじりし、銀行を休むことになる口実と理由のない自殺の考えをもてあそび、朝食代わりと勇気をふるいたたせるための二杯のブランデーを飲む。⁽⁶⁾

Kの罪はどこにあるのか。StarosteはKが監視人を自室に招き入れた瞬間の状況をまずこう説明している。

逮捕は、Kが好奇心の対象になり、死の準備をする老人たちの方へ一瞥しながら、奇異の念と空腹との中間状態に陥る時、個人の領域で生じる。それは、Kが人間存在をその最後の方から全体的に見始め、甘やかされた生活の個人的繁栄の中で疎外される瞬間なのだ。このような認識を通して、自分が有限であることが知らされることにより、Kは本当の愛の出会いにおいて、他者を不懐なる自己としてとらえうるということを、意識せねばならないのだ。

「女性は、いやもっと端的な言い方をすれば、結婚は、君が対決すべき人生の代表者ではあるまいか。」(H. 87)

Kの罪はまさにこの点にある。Kはエルザやビュルストナー嬢をなるほど愛してはいるが、絶対的な意味で愛しているのではない。Kの罪は「人生の代表者」と対決していないこと、怠惰な受動性の中で、無計画に、自己を失って生活していることにあるのだ。Kは「呼び出されて弁明をせねばならない瞬間」(B. 217)に、即ち彼の三十歳の誕生日に、「逮捕」でもって自己選択を追られ

るのだ。⁽⁷⁾

Kは選ばれた者なのであり、逮捕は彼の覚醒を促すものなのだ。次の諸人物の言葉は逮捕の理由を裏づけている。監視人はすでに「自分たちがKの係になったことを幸運だ」(P. 8)と説明している。監督は「絶望だなんてとんでもない。あなたは逮捕された、というだけのことなのです。」(P. 17)と言う。下宿の女将は「逮捕はKの幸せに関すること」(P. 22)と言う。またK自身もビュルストナー嬢に審理の様子を説明する際こう言っている。「……監督が、まるで私の目をさまさせなくてはならないかのように、大声で呼びます。……もっとも彼がそんなふうになるのは、私の名前だけなんです」(P. 29)と。

Kの罪が彼の生活に、とりわけ結婚に対する彼の不決断にあるとするなら、ビュルストナー嬢の部屋がその本来の機能を失って、審理委員会の部屋になるのもそう不思議なことではない。⁽⁸⁾

しかし、Kは出来事の突発性と異質性に目をくらまされて、自己選択の行為を怠ってしまうのだ。逮捕は通告だけで、Kの身柄を拘束するものではない。Kは職務や生き方を投げ出すべきではない。だが彼は職務と日常生活の中で自分が逮捕されていることを意識しているべきなのだ。彼は日常の中でそれを超える生の見解を獲得すべきなのだ。

「(そのなかで)最も大切な、あるいは最も魅力ある願いとして浮かんだのは、人生の展望を得る(そして、むろんこれと必然的に結びついたものとして世の人々が信じるようにそれを書きあらわす)ことだった。この展望において、生には自然の大きな浮き沈みこそあれ、しかし同時に生を、無や夢や浮動とおなじ程度にあきらかに認識したいのだ。もしも正しく願ったとすれば、これはおそらく美しい願いだったろう。いわばテーブルを恐ろしく几帳面な熟練さで槌で叩いて、組み立てていながら、同時に何もしていないといった願いなのだ。しかも「槌で叩くのはあの男には無だ」といわれる風ではなく、「槌で叩くのはあの男にとっては現実に叩くことなのだが、同時に無だ」といわれる風にある。それによって槌で叩く行為はもっと大胆に、もっと強く、もっ

と現実的になっただろう。そしてお前が望むなら、もっと気狂い染みてきただろう」(B. 217/218)

(3)

「最初の審理」

この訴訟がK自身に、交換不可能な個人としてのKにのみ関わっていることは、廷丁の妻の発言によって知られる。彼女はこう言う。「あなたがおはいりになったら、閉めなくちゃなりません、もうあとはだれも入れてはならないんです」(P. 37)

にもかかわらずKは自分の訴訟をまるで他人事のようにしか考えていない。

Kは審理室の聴衆を前にしてこう述べる。「この一件は私には縁のうすいことです。ですから私は平静な判断をくだせますが、みなさんとしても——……私の言うことに耳を傾けてくだされば、大いに有益だということになりましょ⁽⁹⁾う」(P. 43) Kは弾劾演説に終始し、自己に関しては一言も弁明しないばかりか「時間がなく、ほどなく立ち去るつもりだ」(P. 43)と言う。

彼の態度は「性急さ」によってきわだっている。このような事象は八折判ノートではこうしるされている。

「人間には二つの大罪があって、他の一切の罪はこれから派生するのである。それは短気と怠惰である。人間は短気のゆえに楽園を追われ、怠惰のゆえに戻らないのである。だが短気という一つの大罪があるのみかもしれぬ。人間は短気のゆえに追放され、短気のゆえに復帰しないのである」(A. 3)

Kは裁判所が彼に要求している態度から程遠く、「訊問というものが逮捕された者にとって、いつの場合でも意味している利点」(P. 45)を自ら奪い取ってしまうのである。

(4)

「裁判所事務局」

Kは「延丁よりも足早に階段をのぼっていき」「入口のところであやうく転びそうに」(P.57) なる。ドアの後にまだもうひとつの階段があったのだ。

「まことの道は一本の綱である。その綱は空中に張られているのではなく、地面のすぐ上に張ってある。どうやらそれは、渡るためのものよりも、躓かせるためのものらしい」⁽¹⁰⁾ (A.1)

ドアの後の階段は、空間的な連続性の終了を K に知らせるはずであり、それは彼が二つの異なる領域間の過渡地点にあり、ひっくりめてアパート全体がなお代表している日常の経験的・事実的な空間から、逮捕の呼声と共に通常の存在圏から連れ出されてしまったところの諸力の空間へのぼっていることを彼に示すはずなのだ。この階段は、K を躓せることによって「彼がこの生の歩き方と道とを選ぶことができる」(A.89) という限りで、自由であることを彼に意識させるはずなのだ。

廊下の待合室で K は被告たちに会う。被告たちと K の相異点は次のことにある。彼らは待つことでようやく（自己支配的な短気ではなく）自分の訴訟にふさわしい立場へ達することを暗示しているのだ。

「観照も、行動も、真理らしきものを持っている。けれども、観照から発した行動、ないしは観照にさかのぼる行動のみが、まことの真理である」(H.86)

被告たちは上記の考察の前半部に相応している。彼らは観照する者であり、目下の所「真理らしきもの」の中にとどまっているにすぎぬ。K はそれに対して観照が欠けており、カフカによれば観照と同様に真理らしきものを持っているとされる「行動」へ狩り立てられているにすぎない。

K は「絶えず延丁の一、二歩さきを歩き」「延丁が自分に追いつくのをしょっちゅう待ちながら」(P.59) とうとう出口がどこか分らない地点まで到達する。

「ある地点からは、もはや立ち帰ることはできない。その地点まで到達せねばならぬ」(A. 5)

しかも K が迷った道は、廷丁も驚くほどの「ひとつっきりの道」(P. 60) なのだ。K はすでに「もうこれ以上は侵入したいとも思わず、これまでに見たものだけでもうじゅうぶんに胸苦しくなって」(P. 60) いたのだ。

「ここでのみ苦悩は苦悩である。けれども、ここで悩むものは、よそではこの苦悩のゆえに高められるというような意味ではない。この世で悩みとよばれるものが、別の世界では、その姿を変えることなく、ただその対立物から解放されて、幸福となるという意味である」⁽¹¹⁾ (A. 97)

K は事務局にとどまり、この耐えがたい「胸苦しさ」を耐えねばならない。そうすれば別の世界に入り、苦悩から解放され、幸福になるのだろう。K の上にその徴候があらわれる。

「娘と廷丁は K の顔を見つめて、つぎの瞬間 K の身にはなにか大きな変化 (Verwandlung) が起こるにちがいない、それを見のがさずにはおくものか、といった様子なのだ」(P. 61)

K は「胸苦しさ」と「目まい」とで体を支えることができない。娘の差し出す椅子にすぐ腰を下ろしてしまう⁽¹²⁾。K はここですべての慣れ親しんだ物がすべり落ち、もはや拠り所を見出すこともできない不気味な地点に到達したのだ。

「精神は、それが支えであることをやめたとき、はじめて自由になる」(H. 72)

周囲の人々は、K が様々な動機から自らを解き放ち、固執しようとする意志

を放棄することによって、完全な異質性の中で本当に存在するものを経験し、精神的な自己存在という自由へ突破することを期待する。周囲の人々はたとえ「みんな喜んで人を助けてあげたい」(P.64) と思っているとしても K を助けることはできない。K は「ぜんぜん聞きたがっていない」(P.63) からである。

「汝自身を認識せよとは、汝自身を観察せよということではない。汝を観察せよというのは蛇の言葉である。それは、汝を汝の行為の主人たらしめよという意味だ。ところで、汝はもうそうになっている。もう、汝の行為の主人なのだ。だとすると、その言葉は、汝を誤認せよ！汝を破壊せよ！ということ、つまり悪い意味になってくる——そして、人は非常に深く身を屈する場合だけ、自分の善を聞くことができるのだ。善は言う。『汝をあるがままの汝たらしめるために』」(H.59)

K はこの地点で耐えがたいもののそばにとどまることによって、自分を誤認し自分を破壊して、あるがままの彼たらしめることができるのだろう。K はしかし苦悩を恐れて後ずさりする。

「苦悩は、この世の肯定的要素である。いや、この世と絶対者との間の唯一の結びつきである」(H.80)

K は自らこの「結びつき」を放棄し、おそらくは目標間近で引き返してしまったのだ。

「君は自制によってこの世の苦悩から遠ざかることができる。それは君の自由であり、君の本性に従えばよいことだ。だが、この自制こそ、君が避けうることだ一つの苦悩であるかもしれない」(A.103)

(5)

Kと彼がついに見ることのできなかつた高級裁判所の中間に位置し、Kに様々な訴訟に関する情報を与える諸人物は、Staroste によればすべてKにとって肯定的な意味をもつとされる。即ち、彼らはKにとって救済の可能性を意味しているのだ。Kが救済に至らないのは、ひとえに彼らの言葉の意味を理解しないからである。彼らの助言の意味は「Kは自律的な主観としての自己を見捨てるべきなのであり、裁判所を自分の絶対性の探求の対象として利用し、理解できるようにすべきではない」ことにあるのだ。

「笞刑吏」

Kの勤務する銀行の物置で二人の監視人が笞打たれる。Kのために演出されたこの出来事もKに救済のひとつの可能性を与える。Kは「本気で監視人を逃がしてやりたい」と思うが、それを妨げるのは、銀行の小使いにこの一件を目撃されることによって生じる犠牲なのである。「そこまでやる気だったら、もう自分から進んで服を脱ぎ、笞刑吏に、二人の監視人の身代わりになると申し出たほうが、もっと簡単だったようなものだ」(P. 78) Kは自分が払う犠牲の大きさ故に決してこの考えを実行できない。Kはひょっとすると自己犠牲（個人として自分自身を笞刑吏にさしだす）の苦痛を通して、自分の罪を意識できたかもしれないのだ。

「弁護士フルト」

「恩寵」という意味の名を持つ、この弁護士は、裁判所と個人的つてを持っており、Kに様々な情報を与えてくれる。だが彼の助言は「君に何が欠けているかを教えてやろうというのじゃない。君にあるものが欠けていることを教えてやろう」(H. 85) という意味であるにすぎない。というのも「すべての人間が生活のために必要としていても、しかし何人からも貰ったり買ったりできぬものが真実です。人間は一人一人が、自らの内部から真実を生み出さねばなら

ぬ。さもないと死滅するのです。真実なき生活は不可能です。おそらく真実とは、生活そのものかも知れません」(J. 224)

フルトの役割は様々な情報を与えることによってKに自分のことを心配させることにある。だが具体的な援助を期待するKはますます事態を悪くしてしまう。フルトのもとでの滞在はKにとって隠れ家 (Verstecke) となる。

「隠れ家は無数にある、救済はただ一つだ。だが救済の可能性は隠れ家の数だけある」(A. 26)

「看護婦レーニ」

レーニの助言の核心は「Kがあまりに強情であること」「白状しなくてはならぬこと」「他人の援助の必要性」である。しかも彼女はそれをKのためにするつもりがあると言う。

彼は廷丁の妻の場合と同様に、すすんで協力しようとする他者を誤解してしまう。Kは絶対的な意味では他者をつかんでいない。レーニは「Kがエルザと自分とを取りかえてもたいしてエルザを恋しがらないでしょう」(P. 96) と言うが、それは正しい。Kは、他者をつかまえてはじめて、孤独な主観性から脱却できるのだろう。

Kにとって、エルザが彼の訴訟のことを何も知らないことが長所である一方、レーニは「そんなのは長所じゃない」(P. 96) と言い、小さな欠陥「けづめ」を彼に誇らかに見せる。そしてKはこの「けづめ」によって絨毯の上までひきずりおろされる。

「悪魔的なものは、ときおり善の装いをおび、それどころか完全に善として具現することがある。もしそれが伏せられていたら、もちろんぼくはころりと参ってしまうだろう。この装われた善は、本物の善よりも魅力的だからである。しかし、もしそれが伏せられていなかったとしたら、どうか？ぼくが、悪魔たちに追いつめられて、善の中へ逃げこんでいくとしたら？嫌悪の対象とし

て悪魔たちに身体中を針の先で突っつかれ、善の方へとものたうち転がり、そこへ追い落とされるのだとしたら？しかもそこで、善があからさまに蹴爪をむきだしてぼくに把みかかってくるのだとしたら、どうなるだろう？ぼくは一步あらずさり、しおしおと、物悲しく、この間ずっとぼくの背後でぼくの決断を待っていた悪の手のなかへ、ろよけ込むことだろう。」(H. 56)

裁判所は悪の形をとって⁽¹³⁾Kを善の方へ転がそうとする。Kは正に「嫌悪の対象」となり、「追い落とされ」かかっている。今やレーニの「けづめ」がKをとらえるが、彼は彼女を交換可能に愛し、チャンスを無に帰してしまう。

「この現世の誘惑手段と、この現世がひとつのうつろいにほかならないという保証の徴とは、おなじものである。これは当然であろう。現世はうつろうからこそわれわれを誘惑できるのであり、これは真理にかなっている。ところでこの場合に最も悪いのは、われわれが誘惑にまんまとかかったあと、あのうつろいの保証のほうを忘れてしまうこと、そこでじつは善の方がわれわれを悪に誘い、女のまなざしがベットに誘いこんだことになってしまうことである。」(A. 105)

潜在的な善レーニはKを悪へと誘い、Kはレーニと絨毯の上で情交にふけることになる。即ち、Kは「あのうつろいの保証」を忘れてしまったのである。⁽¹⁴⁾

「画家チトレリ」

画家への道はある工場主によって開かれる。工場主はこう言う。「あなたは弁護士みたいな方ですからな。私はいつもこう言っているんですよ。業務主任のKさんは弁護士みたいな人だって」(P. 117) フルトの言う「ほとんどすべてのことは被告自身の負担になる」という言葉同様、K自身が自分の弁護士であらねばならないのだ。

チトレリの持っている救済の可能性は、Kに訴訟の本質を洞察させることだ

けでなく（画家は言う「あなたは事がらの核心をつかまれました」と）Kを描くことができることにもある。画家は工場主の紹介状に目を通すとすぐに「絵をお買いになりたいのですか、それとも肖像画をかかせるのですか」（P. 125）と尋ねている。Kはおそらく描かれた自分の肖像画と向かいあえば、その時に自己に注意を向けることができるのだらう。⁽¹⁵⁾

画家のこの質問の意味をKは理解できず、Kは描かれるのではなく、裁判官の絵に関して説明を受けることになる。すでにレーニは「裁判官は実際は玉座にすわっているのではなく、普通の台所の椅子にすわっているのだ」（P. 74）と言っている。画家も「高い位の裁判官でないで、こんな玉座のような椅子にはまだ一度もすわったことがない」（P. 126）と言う。Staroste はここから『支那の長城がきずかれたとき』の一節を引用して、裁判官は「われわれと同じ一個の人間」であり、「裁判官」はしかし世界の屋根々々にそびえる大きな存在なのだと推測している。

Kの帰り際に画家は陰鬱な荒野の風景を描いた絵を手渡す。その絵はKの本質の中にある陰鬱さに一致し、自分がそれを好んでいることに気付かされる。画家の意図はKの内面にこの絵をぶつけることによって彼の覚醒を促そうとすることにある。だが、Kはそれらの絵を「机の一番下の引出しに入れて鍵をかける」（P. 142）のだ。と同時にKは「自分の本質」を排除したのである。⁽¹⁶⁾

「商人ブロック」

被告であるにもかかわらずKを好遇しすぎた弁護士は、それがKに自己過大評価を促す結果となったことを知り、こう言う。「……鎖につながれている方が自由であるよりもいい、ということがよくありますからな。⁽¹⁷⁾しかしわしはあなたに他の被告がどんなふうに使われているか、それを見せてあげたいと思います。うまくいけば、そこから何か教訓をひき出すことができそうですからな」（P. 162）

この教訓とは、ブロック演ずるところの「弁護士の犬」のような役割である。ブロックは弁護士の姿が「まぶしくてたまらないといった風情で」耳を傾

け、膝まづき、羽根蒲団をさする。Kは彼のこの行為に怒りとやりきれなさを覚えるが、正にこのブロックの態度こそKに欠けていたものなのだ。即ち「謙虚さ」(Demut)である。

「謙虚はすべての人に、ひとりで絶望するものにさえ、同胞に対するもっとも強い関係を与える。しかも、時を移さず与えるのである。とはいえ、それが完全な、持続的な謙虚の場合に限ることは、いうまでもあるまい。謙虚にそれがなしうるのは、謙虚こそまことの祈りの言葉であり、同時に恋慕であり、もっとも固い結合でもあるからである」(A. 106)

だが、ブロックは謙虚であることの単なる受動性のうちにとどまったままであり、カフカが次のように解説している事柄を見のがしているのだ。すぐ上のアフォリズムの後半部は次のようになっている。

「同胞に対する関係は祈りの関係であり、自己に対する関係は努力の関係である。祈りの中から、努力への力が湧き出るのである」(A. 106)

少なくともブロックは「待つ者」であり、ほとんど耐えがたいものを耐えることによって、自分の生にもっと高い位を与えるものを知るはずなのだ。ここからKは何も学ばず、思いあがった主観性という無知で騒ぎたてるのだ。だが、実は裁判所ではなくこのような自己こそKが破壊すべき「障害」だったのである。

「くもしも……なら、汝は死なねばならぬ」という言葉の意味は、認識に二種あり、永生への階段と、それへの障碍とである。君が認識を得たのち、永生へ達しようと思うならば——そして、君はそう思わざるをえないであろう、認識とはこの意志なのであるから——君は、破壊であるところの階段を作るために、君自身をつまりその障碍を破壊しなければならないであろう。したがって、樂園追放は行為ではなかった。生起であった」(H. 78)

Kは自分に対して悪意を持ち、罪あるように見える世界（裁判所）を破壊しようとするが、それは破壊しえぬものなのだ。

「……われわれは、この世を破壊することはできぬ。なぜならば、われわれはそれを独立物として作り上げたのではなく、われわれがその中へ迷い込んでいるのである。そればかりではない。この世がわれわれの迷いであり、そうであるからこそ、それ自体破壊しえぬものである。あるいはむしろ、断念によってではなく、それを仕上げることによってのみ、破壊しうるあるもの、⁽¹⁸⁾というべきであろう……だがそれもこの世の内部においてのことである」(H. 80)

「僧」

弁護士を解雇した後でKにとってあらゆる救済の可能性がとだえたかに見える物語の結末近くで、裁判所はもう一度だけ彼を善の中へ狩り立てる。聖堂へ出かける間際の電話でレーニは「連中があなたをかりたてているんだわ」(P. 173) と言う。

Kが裁判所の本質に関して思い違いをしているために僧は彼にひとつの伝説を語る。そこでは、田舎の男が掟の前に到着するが、門番の威嚇が男の入場を妨げる。門番は言う。「そんなに入りたいのなら、わしの禁止にかまわず入って行ってみるがいい。しかし忘れないでもらいたいのだが、わしには力がある。しかもそのわしはいちばん下っぱの門番にすぎない。広間から広間へゆくごとに門番が立っており、その力はつぎつぎに大きくなってゆくのだ。三番目の門番となると、もうその姿は、このわしでさえ恐ろしくて見ていられないくらいなのだ」(P. 182)

田舎の男はまず待つことによって、未知の耐えがたいものへ心を集中せねばならず、彼が断念しはじめたところの田舎の生活の眠りから目を覚まさねばならないのだ。また彼が入場する時には死を耐えることができなければならないことを知る。

「だれしも認識だけでは満足することができず、それに則って行動しようと

努力したくなる。だが、そうするだけの力は、人間に与えられていないので、われとわが身を破壊することになる。そのために、必要な力さえ失うという危険をおかす。しかし人間とすれば、この最後の試みをする以外には手がないのである。（これはまた、認識の樹の実を食べることを禁止するのに、死をもって威嚇する意味でもある。あるいは、自然死ということの本来の意味であるかもしれない）さて、人間はこの試みに怖れを感じる。むしろ、善悪の認識を後戻りさせようとする。（「人間墮落」という言葉は、この恐怖までさかのぼる）だが、いちど起こったことは後戻りさせることはできない。ぼやかせるだけである。この目的のために、理由づけということがはじまる。世界中は、理由づけで充満している。いや可視世界のすべてが、一瞬の安らぎを求める人間の理由づけにほかならないとさえ、言えるかも知れない」（H. 76）

田舎の男は門番の要請（「はいってみるがいい」）に則って行動する力を持っていない。彼の入場を妨げるのは、門番による死の威嚇である（「わたしには力がある。……」）。このことが意味するのは次のようなことである。男自身が苦悩から身を寄り、耐えがたいものを避けようという望みでもって入場を妨げているのだ。門は開いている。だから入場の可能性はある。門番は「今はだめだ」「だが後でなら」とその可能性をほのめかす。男は待つことに決める。男は「今」と「後」とを文字通り時間的に理解する⁽¹⁹⁾。ところが門番の言う意味は、男の過去（田舎での生活）が彼を規定し、将来への構想に彼を向かわせていない今はだめだ、というもののなのだ。ここで言う入場の可能性とは、一定の外的な条件が与えられるならば実現するというものでなく、人間が自己を獲得したり、喪失したりすることによって、すでに常にそれに対して振舞い、それに関して決定してしまっているところのものなのだ。男は生涯の最後近くになって、決定的な質問に達し、掟の輝きを見る。しかし彼は彼に与えてやろうと思われていたものの周辺で人間存在の成就には至っていない。「自分を見捨てるな。たとえ救済が来ないとしても私はやはりいつの瞬間でもそれにふさわしくあろうと思う」というカフカの言葉の意味で、掟へ近づくという努力こそが田

舎の男が手に入れるべき真理だったのである。

Kは自分の誤った振舞いを反省するが、依然として観察者にとどまる。「今おれにできる唯一のことは、冷静にことを区分けしてゆく分別を、最後まで保つということだ。おれはいつも二十本の手で世のなかに飛びこんでゆこうとし、しかもそれが、是認できる目的のためではなかったのだ。これはまちがっていた。……」(P.192)そして「この包丁を自らつかみ、自らの体をえぐるのが、自分の義務だろう、とはっきりさとる」(P.194)のだが、この義務を避ける。彼は自分の生の正当化も、と同時に自分の死の正当化をも見出さない。彼の死は救済の死ではなく、自由な自己存在への突破でもない。

引用は全て Fischer Taschenbuch Verlag, Ungekürzte Ausgabe 1976 による。

P=Der Prozeß

H=Hochzeitsvorbereitungen auf dem Lande

B=Beschreibung eines Kampfes

A=Aphorismen『罪、苦悩、希望、まことの道についての考察』

J=Gustav Tanouch: Gespräche mit Kafka, S. Fischer, Frankfurt am Main, 1968

尚、„Der Prozeß“ 本文の訳は、岩波文庫『審判』辻暎訳を、その他は新潮社版旧カフカ全集（部分的には新版からも）から借用させていただきました。

(注)

- (1) Hoffmann, Werner: Kafkas Aphorismen, Francke, Bern und München, 1975 S.5~S.11
- (2) Staroste, Wolfgang: Der Raum des Menschen in Kafkas "Prozeß", in: Raum und Realität in dichterischer Gestaltung, Lothar Stiehme, Heiderberg, 1971 S.123~S.155
- (3) Brod, Max: Franz Kafkas Glauben und Lehre 邦訳『カフカその信仰と教義』岡田幸一、川原栄峰訳、パンセ書院、昭和29年。15頁~16頁。
- (4) Kraft, Herbert: Kafka—Wirklichkeit und Perspektive, Lothar Rotsch, Bebenhausen, 1972 S.53
- (5) 一度、裁判所の側に立って物語を読めば、「親切」なのはこの二人に限ったことでなく、裁判所に関わるすべての人がそうなのだ。K自身は聖堂で会う僧にのみ「善意」を感じているが、身を犠牲にしてまでKに援助を申し出る廷丁の妻、情報を与えてくれる一連の人々、事務局の廊下で会う案内係や娘も彼を助

ける者なのだ。とくにこの案内係と娘とKのやりとりは面白い。結果としてこの二人はKを事務局の外へ運び出してしまふのだが、少くともそれはKが願ったからであり、彼らの方からKに不利益な事をしかけることはない。

- (6) 間もなくKは監督と称する人物にお目通りを許されるが、その際監視人たちは断固として「黒の上着」を着るようKに強制する。他方、KはKで「監視人たちが風呂にはいれと強制するのを忘れてしまった」と思う。

この間の事情は八折判ノートでは次のようにしるされている。〈至聖所にはいる前に、君は靴を脱がねばならぬ。いや、靴ばかりではない。旅の服装や荷物や、その他一切のものを脱ぎすてねばならない。一切のものという中には、裸身も含まれる。また、裸身の下にあり、その奥にひそむ一切のものが含まれる。さては、核も、核の核も含まれる。さらに、その他のもの、その残りのもの、さては、永遠の火の輝きさえも含まれる。そうしてはじめて、火そのものが至聖所に吸収されるし、また吸収してもらうことができる。その二つながら、至聖所の意に逆うことはできぬ。〉(H. 77)

また未完成の章「その建物」では、Kは画家をくどきおとすことに成功し、まばゆいもうひとつの世界を経験するが、その時Kは「新しい長い黒い服」を着ており、「以前着ていた彼の服はかためて置かれている」のだ。しかも黒い上着やズボンのみならず、ワイシャツまでもが。

- (7) カフカの肉声では(即ち1914年2月23日の『日記』では)次のようになっている。「ここにいて、ぼくはFを忘れないだろう、だから結婚しないだろう。それはすべてもう決まっているのか。そうだ、ぼくはそう判断できる。ぼくはもう三十一になりかけており、Fを知ってからかれこれ二年になる。つまりもう見透しをつけねばならない……。」

- (8) フェリーツェとの婚約解消をする時のことをカフカはすでに『日記』の中で「ホテルの中の法廷」と表現している。

- (9) もっともKのこの発言は、「あなたは室内塗職ですか」という予審判事の質問に端を発するものである。Kは被告の職業さえ正確に把握していないこの質問にそそのかされて、弾劾演説を始めるのだ。だが、この質問はどのようにでも解釈されうるものであり、それ自体確固たる意味を持っていない。Kは演説でもって聴衆に影響を与えようとするが、やがて彼らも裁判所の仲間ということが判明し、Kは自分の演説によって欺かれてしまう。これが物語の全経過を通じての裁判所の反応パターンである。裁判所はKを拒絶することも、承認することもなく、Kはただ自分の解釈にゆだねられているにすぎない。したがって原則的にはKの訴訟に進展はない。フルトも「一般的に言って訴訟手続は、世人に対しても秘密であるばかりではなく、被告に対しても秘密なのだ」と言う。逮捕といえども、それは単なる通告にすぎず、Kの身柄を拘束するものではなく、この最初の審理の場合でも、開始時間や開催場所ともKが勝手にそう決めてしまっただけのことである。このことに関しては、Jürgen Steffan: Darstel-

lung und Wahrnehmung der Wirklichkeit in Franz Kafkas Romanen
S. 151~153 参照のこと。

- (10) アフォリズム17「ここは、はじめての土地だ。呼吸が乱れた。太陽のそばに、それよりももっとまぶしく、一つの星が輝いている」これも同様の意味にとれるであろう。
- (11) この考察に類するものはいくつか見出される。たとえば『日記』にはこうある。「悪いものはない、君が入口を越えると全ては良いのだ。もう一つの世界、そして君は語る必要もない」あるいは『対話』では「……危機は狭いかざられた瞬間にすぎません。そこに深淵がかくれているのです。これを超えればすべてが一変してしまいます。ただ瞬間が問題です。瞬間が生活を決定するのである。あるいは「告白。絶対的な告白。さっと開く門。建物の内部に世界があらわれる。世界のどんよりした反射はこれまで外にあったのに」(H. 204)
- (12) 椅子をさしだすという娘の行為は、Kの救済に逆うものだ。Kは椅子がなければ身体を支えられず、その身体を破壊しえたかもしれないからだ。だが腰かけたKのすぐ目の前に寄せられた娘の顔の「きつい表情」はKが腰かけたことを暗に批難しているように思われる。あるいは、椅子をさしだす行為がすでに、Kをその場所にとどめておくための親切な行為と理解すべきなのであろうか。
- (13) 裁判所の世界はすべてKの理性、感情に逆うようになっている。監視人の愚鈍さ、監督の馬鹿げた仕草、貧困に特徴づけられた安アパートの審理室、足の曲がった学生等々。
なお女の爪に関しては『対話』の中に次のようなカフカの言葉がある。「女性は罠のようなものです。人を四方から狙っていて、単なる有限へと引きずり込むのです。人が自ら進んで一つの罠に跳び込んでゆけば、それらは危険性を失います。しかし慣れによってこれを克服するならば、ふたたび女のあらゆる鉄の爪が口を開くのです」(J. 238)
- (14) これはすでに引用したカフカの考察中の「……生には自然の大きな浮き沈みこそあれ、しかし同時に生を、無や夢や浮動と同じ程度にあきらかに認識したいのだ……」という境地に反するのだらう。
- (15) 裁判所の少女たちは、画家がKの肖像画を描くかどうか、異常なまでの好奇心を示して見まもっている。これと類似した光景をわれわれはすでに裁判所事務局の廊下で見た。Kの周囲の人々はKの変身を見まもるのだ。
- (16) Kが荒野の絵を処理したこのやり方は、銀行の物置で監視人が笞打たれた際に行ったKの処置と同質のものである。Kは特に自分のために演出されたこの出来事を理解せず、物置を小使いたちに片付けさせる。そうすることによってKは自分を脅かすものを排除しようとしたのだ。
- (17) フルトのこの言葉はカフカの考察によれば次のような意味に理解される。「自由と束縛とは、本質的な意味では同じものである。いかなる本質的な意味においてであるか。奴隷は自由を失うことはないから、ある面では自由人よりも自

由である、というような意味ではない。」(H. 84) それではどんな意味なのか。同じカフカの考察。「君の意志は自由である、という言葉は、それが荒野に行こうとしたとき、それは自由であった、というほどの意味である。それは荒野を横切る道を選ぶことができるのだから、自由である。それは歩き方を選ぶことができるのだから、自由である。だが、君は荒野を行かねばならないのだから、君の意志はやはり不自由である。どの道も迷宮に似て、一尺の荒野に触れるのであるから、やはり不自由である」(H. 87) あるいはこの考察の次の「三種の自由」(A. 89) も。

- (18) この考察と密接な関連のあるもの。「ひとは外部から理論で世界をみごとに押し込めるが、自分も一緒に穴にはまってしまう。だが、ただ内部からだけ、自己と世界を静かに、真実に維持する」(H. 55)
- (19) われわれの時間概念で考えてはならぬ、もう一つの例。「最後の審判といういい方をさせるのは、われわれの時間概念にほかならぬ。実は即決裁判なのだ」(A. 40) これに基づいて考えるならば、田舎の男は掟の前に立った時、すでにその場で裁かれていたのだ。カフカはヤノーホにこう語っている。「……私は恩寵を正当に期待できる者でありたいと努力を重ねています。私は待ち、そして見つめています。恩寵は来るかも知れない——また来ないかも知れませぬ。この安らかな不安の期待が、すでにその前触れ、あるいは恩寵そのものかも知れないのです。私には分らない。しかし分らぬということは私を不安にはしない。私は時が経つにつれて——私の無知と友情を結んだのです」(J. 223) そしてこの言葉が Staroste によれば田舎の男の、と同時にKの、到達すべき真理なのである。僧の言う「判決はいちどきにくだされるものではなく、訴訟手続が次第に判決へと転じてゆくのだ」という言葉も、チトレリの描く裁判官の絵では、正義は素速い動きの中にあり、翼をつけていることも、常に瞬間々々の恩寵にふさわしい心のあり方が問題であることを教えるものなのであろう。